1871　仮病院 仮医学校開設

1872　養病院設置

1873　仮病院 医学講習場設置

1875　愛知県病院設置

1876　公立医学所 公立医学講習場設置

1878　公立医学校設置

1881　愛知医学校設置

1901　愛知県立医学校設置

1903　愛知県立医学専門学校設置

1908　第八高等学校設置

1920　愛知医科大学設置／名古屋高等商業学校設置

1931　（官立移管）名古屋医科大学設置

1939　名古屋帝国大学創設（医学部と理工学部の2学部）／名古屋帝国大学臨時附属医学専門部設置

1942　名古屋帝国大学理工学部を理学部と工学部に分離

1943　名古屋帝国大学航空医学研究所設置（1945 廃止）

1944　名古屋工業経営専門学校設置（1946 廃止）／名古屋経済専門学校設置／名古屋帝国大学附属医学専門部設置

1945　岡崎高等師範学校設置

1946　名古屋帝国大学環境医学研究所設置

1947　名古屋大学（旧制）と改称／名古屋大学附属医学専門部設置

1948　名古屋大学文学部、法経学部を設置

1949　旧制名大、医専部、八高、名経専、岡崎高師を包括／

文、教育、法経、理、医、工の6学部及び環境医学研究所で新制名古屋大学として発足／空電研究所、附属図書館を設置

1950　法経学部を法学部と経済学部に分離

Nagoya University

PROFILE 2009

1951　農学部設置

1953　文学、教育学、法学、経済学、理学、工学の6研究科を設置

1955　医学、農学の2研究科を設置

1961　プラズマ研究所設置（1989 廃止、核融合科学研究所へ発展）

1963　教養部設置（1993 廃止）

1971　大型計算機センター設置（2002 廃止）

1973　水圏科学研究所設置

1977　名古屋大学医療技術短期大学部併設（2001 廃止）

1990　空電研究所を太陽地球環境研究所に改組

1991　大学院国際開発研究科設置

1992　大学院人間情報学研究科設置（2003 廃止）

1993　情報文化学部設置／水圏科学研究所を大気水圏科学研究所に改組（2001 廃止）

1995　大学院多元数理科学研究科設置

1997　大学院農学研究科を大学院生命農学研究科に改称

1998　大学院国際言語文化研究科設置

2000　大学院教育学研究科を大学院教育発達科学研究科に改称

2001　大学院環境学研究科設置／地球水循環研究センター設置

2002　情報連携基盤センター設置（2009 廃止）／大学院医学研究科を大学院医学系研究科に改称

2003　大学院情報科学研究科設置

2004　国立大学法人名古屋大学設立／大学院法学研究科実務法曹養成専攻（法科大学院）設置

2006　エコトピア科学研究所設置

2009　情報基盤センター設置

名古屋大学 Nagoya University



Nagoya University

PROFILE 2009

03 ごあいさつ
名古屋大学総長　濵口 道成

特集
04 時を越えて、
継がれゆくもの。

特集 1 【巻頭対談】
06 研究力が真価を語る。
名古屋大学特別教授　益川 敏英
名古屋大学総長　濵口 道成

特集 2
13 未来を拓く研究力。
自由闊達な学風が育んだもの ——14
理学研究科長　國枝 秀世
領域を越えて結んでいく ——16
研究推進室長　馬場 嘉信
独創性を伸ばす教育を貫いて ——17
副総長（教育・情報関係担当）　山本 一良

特集 3
18 創立70年の歴史を糧に。

20 名古屋大学 最前線
FRONTIERS
① 名古屋大学のGCOE ——21
機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点
宇宙基礎原理の探求 素粒子から太陽系、宇宙に至る包括的理解
マイクロ・ナノメカトロニクス教育研究拠点
② 英語教育強化 ——24
③ 建物耐震化8割完了 ——25
④ 法人化後に設置した附属教育研究施設 —26

28 学生からの寄稿
名古屋大学体育会 オリエンテーリング部

29 卒業生からの寄稿
ジョン・ギャスライト

30 大学概要

Greeting from the president

ごあいさつ

2009年4月1日をもちまして、名古屋大学総長に就任いたしました濵口道成です。本学が創立70周年を迎える節目の年に総長の大任をあずかり、責任の重大さを深く受けとめております。

名古屋大学は自由闊達な学風を誇り、新しい時代を切り拓くことのできる「勇気ある知識人を育成する」ことを大学の憲章としています。本学が、高い研究レベルを維持していることは、2008年に本学関係者3名がノーベル賞を受賞したことからもおわかりいただけることでしょう。このような伝統を活かしつつ、今後さらに、バランスのある研究の発展を図り、幅広く中堅、若手研究者の人材育成を進めていくためには、先端的な分野の充実だけでなく、文化の継承を担う分野についても支援していく必要があります。同時に、社会の要請に応えうる研究の展開を図るとともに、世界の研究をリードできる研究環境の整備を進めなくてはなりません。

人材しか資源のない日本において、人材育成は、知の拠点たる大学の担うべき最も重要な使命です。私は、大学教育において、精神的・社会的に自立し、国際的視野を持ち、複眼的視点を持った人材を育てていくべきだと考えています。そのためには、学生教育の国際化を図りつつ、生きた語学教育を強化していく必要があります。また、真理の探究という純学問を基にした教育を重視しつつ、研究科間で連携した大学院教育を進めていきたいと思います。私は、これらの課題を実現することにより、本学の特色ある教育が展開できると確信しています。

価値観が多様化し、混迷する時代の中で、日本の基幹・総合研究大学である本学は、日本の行く末と若者の将来に大きな責任を持っています。私は、未来を切り拓く勇気ある知識人を育て、世界屈指の知的成果を産み出す大学として、名古屋大学がさらに発展・充実していくよう、改革に尽力する所存です。

みなさまのご支援とご協力をお願い申し上げます。

名古屋大学総長
濵口道成





1956年当時の東山キャンパス

中日新聞社 撮影

特集

時を越えて、継がれゆくもの。

2009年、創立70周年を迎えた、名古屋大学。
激動の時代を乗り越え、創立期からの自由闊達な学風を貫きながら
その研究力、教育力を、今日まで進化させてきました。
本誌では、名古屋大学の過去、現在、未来を見つめ、
時を越えて継がれゆく、知と志を、さまざまな角度から紹介します。



現在の東山キャンパス

【巻頭対談】

名古屋大学特別教授
益川 敏英 Toshihide Maskawa

名古屋大学総長
濵口 道成 Michinari Hamaguchi



特集 1

研究力が真価を語る。

創立以来、名古屋大学が継承し、発展させてきた研究力。
2008年のノーベル賞受賞者の顔ぶれは、その真価を世界に発信するものでした。
優れた人材を輩出してきた学風を振り返りながら、大学の研究のあり方、今後の役割などについて、
ノーベル物理学賞を受賞した益川敏英特別教授と濵口道成総長に語り合っていただきました。



研究者としての素養を育てた学風

濵口　名古屋大学は自由闊達な学風を伝統としてきました。その風土はノーベル賞受賞者の方々をはじめ、ここで学び活動した人々に何らかの影響を与えたと思うのですが、益川先生がいらっしゃった頃の名古屋大学はどのような雰囲気だったのでしょうか。

益川　戦争をはさんでいますので、まだ創設期の若々しい雰囲気を残していました。学部を越えて学生同士が交流でき、先生方も若く、ときには一緒に相撲を取ったりして兄貴分のように接していただけた。その一方で、背筋がピンとするような雰囲気を持っておられる先生の姿に、学者とはかくあらねばならんという教示を受けましたし、高校までの先生とは違う研究者の生き様を初めて見て、研究者というものを実感できましたね。

濵口　当時は戦後の復興期で、抑圧された時代からの解放感や真理の探究への渇望感もあったのでしょう。その中で先生は素粒子研究の道へ第一歩を踏み出されたのですね。

益川　名古屋大学の坂田昌一先生が後のクォークモデルの先駆けとなる坂田モデルを発表したと耳にしたのは、高校生のときです。それまでは研究者になりたいなんて考えてもいませんでしたが、坂田先生が東京ではなく、この名古屋で世界に通用する一流の研究をされていると知った。「じゃ、僕もその研究の仲間に入れてもらおう」という気持ちがわいてきたんです。

濵口　では、入学したときから坂田先生の物理学教室に入ろうと、研究者になりたいと思われていたわけですね。

益川　いえ、新しい学問にふれると、それが面白くなる性分で、数学、大脳生理学なども学び、最終的に坂田先生の教室へ入ったんです。ただ、入学当初から研究者には憧れを持ち、自分が活躍する姿を想像してロマンを描いていました。人間は憧れの存在に近づきたいから、背伸びをする。それが大きなエネルギーを引き出すのです。僕は名古屋大学で尊敬できる先生方に巡り会い、素晴らしい友だちに恵まれて本当に良かった。若さにあふれ、学生が自由に羽ばたける学風は、研究者として育っていく上で、とても重要だったと実感しています。

基礎研究は大学の存在の基盤

濵口　先生は基礎研究が非常に重要だというお話をよくされますが、基礎研究と応用研究の関係についてはいかがお考えですか。私の専門である医学分野では、基礎研究の成果を臨床の場に応用していくトランスレーショナルリサーチ（橋渡し研究）や実用化というキーワードが盛んにうたわれ、基礎研究をどうすべきか、という部分が漠然としてきています。

益川　今、大学は日常の研究費が減らされ、競争的資金の獲得に奔走しています。資金の獲得でアピールしやすいのは、これは何々に使えますという応用研究であって、基礎研究の重要性を訴えてもなかなか通じません。しかし「役に立つ科学」という言い方は、それ以外のものが排除されてしまう危険性があります。僕としては、民間でも可能な応用研究は基本的に民間にお願いして、大学は大学にしかできないことをすればいいのではないかと思っているんです。例えば実力のある研究者がこれは面白いと言うならば、その人に自由に任せてみようという度量、基盤を大学は備えていなければならない。もし、それを削ってしまったら、大学の存在が弱々しいものになってしまうと危惧しています。

濵口　やはり、大学は研究や学問の多様性を認め、いかにそれらを維持していくかが大切なんですね。私は医学分野で、基礎研究でありながら応用研究もできるスタンスで研究を進めてきました。その立場から実感したのは、基礎研究でつきとめられた真理がないと応用研究を進めても何も出てこないということです。他方、応用研究の展開があると、基礎研究の存在意義が明らかになる。基礎と応用は双子のような気がいたします。

益川　基礎・応用を問わず、大学全体の研究への取り組みという視点からお話しすれば、昨今は技術力が進んだため、実社会では目的達成のために、ときには強引に技術的な解決の手段を取ることもあるでしょう。しかし、大学で取り組む研究は力ずくで達成するものではなく、問題に正対したときに、基本的にはこういう形で解決すべきだ、こうあるべきだという理想に向かって進めていくもの。それが大学の研究のあり方だと思います。



問題に正対したときに、
こういう形で解決すべきだ、こうあるべきだという
理想に向かって進めていくもの。
それが大学の研究のあり方だと思います。

益川 敏英

1940年生まれ。名古屋大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。東京大学原子核研究所助教授、京都大学基礎物理学研究所教授などを経て、現在、京都産業大学教授、京都大学名誉教授、名古屋大学特別教授。京都大学理学部の助手だった1973年、名古屋大学の後輩である小林誠博士とともに「小林・益川理論」を発表し、2008年ノーベル物理学賞を受賞。



大学教育は人生を形づくる根幹。
そのときは未消化でも30年、40年経って結晶化する、
そんな教育ができる場を作りたいものです。

濵口 道成

1951年生まれ。名古屋大学大学院医学研究科博士課程修了。医学博士。腫瘍生物学を専門分野に、癌関連遺伝子の構造と機能、癌細胞の腫瘍特異的な増殖制御機構や浸潤・転移の制御機構を研究。消化器癌の中で、最も治療が困難な胆管癌に対する新たな治療法を開発する。名古屋大学大学院医学系研究科附属病態制御研究施設長、名古屋大学大学院医学系研究科長・医学部長を経て、2009年名古屋大学総長に就任。

長期的な視点から人材を育てていく

濵口 大学の今後のあり方、人材育成に関して先生のご意見をお聞かせ願えますか。

益川 大学というものは、やはり個性を活かして成果を出していく存在であって、まずは今、自分たちの大学がどのステージにあるのか、持っている資源は何なのか、それを発展させるにはどうしたらいいのかということを考えていかなければいけないと思います。次に10年、20年後、どうなっているかも見据えて、それに対する手立ても同時に打っていかなければならないでしょう。

濵口 長期的な視点は教育においても不可欠です。自分の学生時代を振り返ると、当時は早くプロになりたいと最新の医学を懸命に勉強したんですが、今、心に残っているのは、教養部で夢中になって読んだヘーゲルやドストエフスキーなどの哲学書や文学書。年を重ねて自分の実体験が裏づけられていくと、活字で見た知識が自分の中に結晶化していくように感じ、長い目で見れば原理原則的な教養教育が大事なのだと思っています。大学教育は人生を形づくる根幹です。自分で深く何かを考えたり、いろいろな体験をして、そのときは未消化でも30年、40年経って結晶化する、そんな教育ができる場を作りたいものです。

益川 不思議なことに未消化でもいいんですね。大切なのは、自分の中に残っている未消化のものを消化できる準備をしておくこと。それができていると、いつかふっと理解できる。そうした教育ができるのは、大学だけです。企業でも人材を育てることはできますが、人間の骨格に肉づけするような知識の育成に関しては、大学が一番重要な役割を果たすものと考えます。

濵口 まさにおっしゃる通りですね。今、名古屋大学ではその実践として、文系には理系の、理系には文系の教養教育の提供を行っています。指導陣が自分の専門分野の最先端だけではなく、その分野で10年、20年、場合によっては100年生き延びてきた本質を教えることが今の時代の教養教育ではないかと内容の構想を練っています。また、グローバリゼーションの中で、自己主張できる英語に加えてフランス語、ドイツ語、中国語など生きた語学教育にも力を入れ、医学部で既に成果を挙げている学生の海外派遣を全学部で導入することも検討中です。今の若者は厚い衣を着ていて、生身の自分、本当の力が見えていない場合があるんですね。その衣を脱ぎ捨てさせる自己発見の場が必要かと感じています。

益川 やはり、いろんな経験をさせる場をつくることでしょうね。経験の中で自分の潜在的な力に目覚めていくでしょうし、価値観も広がっていくと思います。

中部の基幹大学として地力を高める

濵口 名古屋大学は総合研究大学であり、中部の基幹大学です。世界レベルの研究ができる人材を育成して世界屈指の知的成果を産み出すとともに、中部はもとより国内外の中核となる人材を輩出するという大きなミッションを掲げていますが、名古屋大学が果たす役割についてはどうお考えですか。

益川 今後求められるのは、生涯教育の基地としての役割です。サバティカルなど長期休暇をとって知識を更新したいという人の基地として、その環境を一層充実させてほしい。企業内でも知識や技術の再教育が行われるのでしょうが、企業活動の中でできることは限られ、周辺の知識まで養う余裕はないでしょう。大学に戻って知識に磨きをかける、充電するということがますます必要になると思います。

濵口 社会人や卒業生を受け入れるシステムが重要ということですね。その基盤には若い人材の獲得につながる活力が欠かせません。しかし、日本の貿易黒字の大部分を生み出し、日本の心臓部とも言える中部の産業界と比べると、まだまだ教育界はふがいない。関東、関西の大学が中部でも学生募集をかけ、この地域から人材が流出してしまう現状が示すように、我々は関東や関西からは頼りない存在に見えるのでしょう。これからの名古屋大学は自由闊達な学風は維持しながら、もっと地力をつけていかなければと思っています。

益川 やはり、名古屋大学に来たいという人がより増えることが重要でしょうね。僕が思うに名古屋大学は、今、人間で言えば壮年期ぐらい。若さもあるし、伝統もある。外部で活躍する人材も出てきた今こそ、脂の乗りはじめた飛躍のときと期待しています。

成長は仲間や先輩との切磋琢磨から

濵口　ノーベル賞受賞者が先輩にいるということは、我々後輩にとって大きな誇りであり自信になります。ぜひ若い人たちへのアドバイスをお願いします。

益川　若者の力、取り柄というのは、ハチャメチャなエネルギーです。多少、間違っていても構わない。動き回っていると、間違っているところはすり減って角がとれていくものです。自分一人で閉じこもらずに、仲間や先輩と切磋琢磨することが成長の道だと僕は思います。

濵口　先生は「これまでに挫折したことはない」ともおっしゃっていますね。それも研究者を目指す後輩へのエールになると思います。

益川　挫折とは、乗り越えるのが困難なことにぶつかったときに、次の一歩が踏み出せないほどダメージを受けたときのことを言うんでしょうね。でも僕は、この道がないのであれば次の道を探せばいいではないかと考えて歩き続けてきました。一つの道を進んだときに答えがなかったら、また違う方向から探せばいい。そういう意味で挫折はないんです。間違うことは人間だから当たり前。失敗したら、もう一度スタートラインに戻って、失敗を経験として初めからやり直せばいいじゃないですか。人生には特別な道が存在するのではなく、ただ、どんな人にも自分がやるに足ることが必ずあると信じています。

濵口　今、時代は閉塞感に満ち、それが若者にも少なからず影響を及ぼしています。ですから、我々は先生の力強いお言葉をもっと伝えていかなければなりません。また、先生をはじめとする個性的な人材が育っていった名古屋大学の風土を今の時代に合わせて充実させていかなければならないと、あらためて意を強くいたしました。本日は貴重なお時間をありがとうございました。





写真左より

益川 敏英　ますかわとしひで
1940年生まれ。名古屋大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。現在、京都産業大学教授、名古屋大学特別教授。1973年、小林誠博士とともに「小林・益川理論」を発表し、2008年ノーベル物理学賞受賞。

小林 誠　こばやしまこと
1944年生まれ。名古屋大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。現在、独立行政法人日本学術振興会理事、名古屋大学特別教授。1973年、名古屋大学時代の先輩である益川敏英博士とともに「小林・益川理論」を発表し、2008年ノーベル物理学賞受賞。

下村 脩　しもむらおさむ
1928年生まれ。長崎医科大学附属薬学専門部（現・長崎大学薬学部）卒業後、名古屋大学で理学博士の学位を取得。名古屋大学理学部助教授などを経て、現在、米ウッズホール海洋生物学研究所特別上席研究員、名古屋大学特別教授。オワンクラゲの緑色蛍光たんぱく質の発見により、2008年ノーベル化学賞受賞。

特集 2

未来を拓く研究力。

2008年10月、ノーベル賞の発表は名古屋大学をおおいに沸かせました。
ノーベル物理学賞受賞の益川敏英特別教授と小林誠特別教授、
化学賞受賞の下村脩特別教授は、いずれも名古屋大学ゆかりの研究者。
世界に冠たる研究力が、名実ともに花開いた瞬間でした。
その源流はどこにあったのか、過去をひもときながら、
伝統を受け継ぐ現在、そして未来への展望を探っていきます。

21世紀に入り、ノーベル賞を受賞した日本人は7名。そのうち名古屋大学関係者は、2001年ノーベル化学賞受賞の野依良治特別教授も含め4名に上ります。創立70年の歴史の中で、世界に誇る才能を育てた名古屋大学の背景には、「自由闊達」という学風が見えてきます。

自由闊達な学風が育んだもの

理学研究科長
國枝 秀世

学問の前では誰もが自由で平等

1950年代～70年代の名古屋大学理学部。ノーベル賞受賞者4名はいずれも、そこで研究の日々を過ごしています。益川博士と小林博士は坂田昌一教授が率いる物理学教室の先輩後輩として出会い、後の「小林・益川理論」の元となる素粒子論を学びました。また、下村博士は研究生として平田義正教授の研究室に参加し、緑色蛍光たんぱく質の研究につながる第一歩を踏み出します。野依博士は助教授として着任し、多くの研究成果を創出しました。

当時の大学の雰囲気について國枝秀世理学研究科長は、「理学部に関して言えば、若い先生が多く、学問をするのに年齢は関係ない。大学院生から若い研究者、教授まで誰もが自由に議論して良いという空気があった」と語ります。それを象徴するのが、教員や助手を「先生」と呼ばず「さん」づけで呼ぶという理学部の伝統。戦後、民主主義の時代を反映し、学問の前ではすべての人が平等である、という気風がこの頃から名古屋大学には息づいていたことがうかがえます。

開拓者精神で新たな研究を推進

自由闊達で活動的な雰囲気は、新たな学問分野への開拓精神にもつながりました。日本の素粒子論をリードした坂田昌一教授、宇宙物理学の礎を築いた早川幸男教授など世界トップレベルの研究者が新しい学問を始め、今日の理系分野の基盤ができたのも1950年代後半。「私が在籍していた70年代にも開拓者たらんとする志は受け継がれ、私自身もX線天文学の草創期から関わることできた」と研究科長は振り返ります。

また、外国人の研究者も多く、国際色豊かな人材が揃っていたのも当時の名古屋大学の特色。世界的な研究者を慕って各国から優れた研究者が集まってくる、そんな開かれた環境が広がっていたのです。東山キャンパスは、まだ開発途上。しかし、この新しいキャンパスで新しい大学を設計しようという気概が学生にも教員にも満ち、それが研究の推進力になっていました。

挑戦を続けることこそ名大70年の伝統

学部間の活発な交流も、名古屋大学の研究力を支えてきた要因の一つです。例えば、理・医・工・農の4学部の研究者間では、早くから最新情報について意見を交わす「科学談話会」が行われてきました。研究者が各自の分野に閉じこもらず学際的な領域にふれる。それが新しいアイデアを生む素地になったのは間違いありません。現在、その志は世界最高水準の研究者を招いて行う名古屋大学レクチャーや月に一度の名大サロンにも引き継がれ、文理問わず、研究者も学生も一般の方も参加できる場になっています。

さらに、名古屋大学では常に研究者を公募し、活発な人事交流を心がけてきました。優秀な人材を囲い込むのではなく積極的に外に出し、さらに新しい人材を獲得していく。研究分野、研究者の新陳代謝を行いながら、世界の壁を乗り越えていく力を蓄えてきたのです。「常に新しい挑戦を続けることこそ名古屋大学70年の伝統」という研究科長の言葉が、独創的なアイデアで世界と戦い、学問を発展させてきた名古屋大学の姿を表しています。



くにえだひでよ
1950年生まれ。名古屋大学大学院理学研究科修士課程修了。理学博士。2005年から名古屋大学大学院理学研究科教授。2009年、理学研究科長に就任。X線天文学を専門分野に、新たな波長の観測に取り組む。

坂田 昌一 Shoichi Sakata
1911年生まれ。元名古屋大学理学部教授。クォークモデルの先駆けとなった「坂田モデル」や「ニュートリノ質量行列」を提唱、現在の素粒子標準モデルの基礎をつくる。1946年、戦後の名古屋大学物理学教室の再建において、その民主的な運営を定めた「物理学教室憲章」を策定し、全国の大学に大きな影響を与えた。日本学士院恩賜賞受賞。1970年逝去。

早川 幸男 Sachio Hayakawa
1923年生まれ。元名古屋大学理学部教授、元名古屋大学長。日本初の宇宙X線のロケット観測に成功し、スペース天文学を創始。名古屋大学に全国の大学で最大規模の宇宙グループを生み出す土壌を拓いた。日本学士院賞受賞。1992年逝去。

平田 義正 Yoshimasa Hirata
1915年生まれ。元名古屋大学理学部教授。フグ毒テトロドトキシン、イワスナイソギンチャクの猛毒パリトキシンなど、複雑な構造をもつ生物活性物質の化学構造を次々と明らかにする。優れた教育者としても知られ、門下から下村脩博士をはじめ多数の有名研究者を世界に輩出している。日本学士院賞受賞、文化功労者。2000年逝去。



1946年当時の物理学教室スタッフ。写真左から2番目が坂田昌一教授。



早川幸男教授



平田義正教授

領域を越えて結んでいく

研究推進室長
馬場 嘉信

研究科間の壁を越え学際的な研究を推進

あれから半世紀。創立期の自由闊達な学風は変わることなく受け継がれ、名古屋大学は豊かな研究力を醸成してきました。21世紀COE、グローバルCOEにも多くのプロジェクトが採択され、ノーベル賞受賞者を輩出してきた基礎研究が今も世界トップレベルであることがわかります。また、平成19年度のグローバルCOEに採択された「システム生命科学」の拠点では理・農が、「分子性機能物質科学」の拠点では理・工が連携。20年度に採択された「マイクロ・ナノメカトロニクス」の拠点では医・工が連携し、「宇宙基礎原理」「機能分子医学」でも専門分野を越えた融合拠点を形成するなど、複数の研究科・専攻・研究室が連携して取り組みを進めていることも大きな特長と言えるでしょう。学生を他研究科の教員が指導することもあり、その連携は研究成果の融合を越えて、人材育成の段階から行われているのです。現代は問題が複雑化し、その解決のためには幅広い分野の知識が必要です。分野間の壁は高いはずですが、研究推進室長の馬場嘉信教授は「名古屋大学は自由闊達な学風によって、研究室どころか研究科の壁さえも越えることができた」と語ります。伝統の学風が現代の学際研究を後押しする。これこそが名古屋大学の大きな強みとなっています。

文理融合を先導する学問分野を開拓

理系分野で学際的な研究が進む一方で、現代社会には文系分野からの取り組みが欠かせない問題も数多く横たわっています。例えば、環境問題の解決には太陽電池などの技術開発だけでなく、法整備や社会の意識の変革も必要となります。また、医療問題の解決には医学や工学に加え、社会システム、コミュニケーション、倫理面からもアプローチしなければなりません。こうした問題に対し、名古屋大学ではいち早く新たな学問分野を開拓。文理融合の研究拠点として、環境学研究科、情報科学研究科、エコトピア科学研究所などを設置し、文系・理系の研究者がともに果敢な挑戦を始めています。「真の意味での文理融合はこれからの大学の課題」と教授が語るように、研究基盤の異なる分野をつなぐことは容易ではありません。しかし、次代を見据えた一歩を名古屋大学は既に踏み出しています。

研究支援体制が未来の研究力を支える

研究をさらに推進するためには、研究支援体制の拡充は不可欠です。名古屋大学では研究者の研究内容を公開し、学内での連携を促す支援を行っているほか、国内外の大学や企業、社会へも積極的に大学情報を発信。競争的研究資金の申請についての事務支援も行うなど、そのサポートは多方面にわたります。
また、世界をリードする研究領域を強化していくと同時に、文化・知の継承を担う分野についても一層の充実を図っていく予定です。社会では世の役に立つ応用研究に注目が集まりがちですが、「研究の裾野が広いからこそ、次の頂点へと伸びる分野が出てくる。世界や社会、人類を理解するために必要な基礎研究、文系分野の重要性をアピールしていきたい」と教授は強調します。同時に研究成果を社会へ還元するため、地域の企業群との産学連携も重視。ものづくりの地にある強みを活かしながら、研究の入口から出口までをうまく結ぶ仕組みを他に先駆けて構築しようとしています。自由闊達な研究風土と充実した研究支援体制。この両輪で名古屋大学の研究力は、未来へ前進を続けていきます。



ばばよしのぶ

1958年生まれ。九州大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。徳島大学教授などを経て、2004年から名古屋大学大学院工学研究科教授。ナノとバイオの融合領域で基礎から産学・医工連携による実用化まで幅広く研究を進めている。研究推進室長、総長補佐（研究推進担当）。

独創性を伸ばす教育を貫いて

副総長（教育・情報関係担当）
山本 一良

既存の価値観にとらわれない

大学にとって研究と並ぶ重要な使命は、教育です。研究力を担うのは人材にほかならず、優れた人材が育たなければ研究の発展も望めません。名古屋大学は「勇気ある知識人」の育成を学術憲章に掲げ、あらゆる困難に立ち向かい世界を切り拓いていく人材を育てるために、自発性を重視した教育を実践しています。
学部教育においては専門教育とともに、基礎・教養教育を大学全体で行う全学教育を展開。多様な価値観にふれて視野を広げる機会を学生に提供するほか、自分で調べ発表し討論を行う主体的な学びをトレーニングし、自分の専門分野の基礎的な能力・技術・ものの考え方を養成できるよう指導しています。山本一良教育担当副総長が「知識を教えて済むのであれば、学問の発展はありえない。学生には学問への姿勢、多面的なものの見方を身につけてもらいたい」と語るように、既存の価値観にとらわれない独創性を育てることこそ、名古屋大学の教育の最大の目的です。

すべての学生に開かれた教育を

大学院教育では、名古屋大学はこれまで“現場主義”をモットーに、研究の現場で知識や考え方を習得する教育を重んじてきました。その伝統を受け継ぎつつも、今後は講義も充実させ、バランスのとれた教育で人材育成に取り組もうとしています。それは他大学出身の学生や留学生など多様な経歴を持つ学生たちが、スムーズに名古屋大学で学ぶための改革でもあります。「ただし、一律ではなく部局ごとに学問の特質に合わせた体制づくりを進める必要がある」と副総長。より良い教育を提供するため自由な議論を重んじる点に、名古屋大学の学風が息づいています。
一方、国際的に通用する人材を育成するため、力を入れているのが、英語教育です。世界のどこでも活躍できる英語力の養成を目指し、2009年度から学部入学者を対象にTOEFLによるクラス分けやeラーニングによる自習システムなどを開始。また、世界に開かれた大学として留学生の受け入れ体制も整備し、日本語教育の強化だけでなく、英語だけで単位が取れるコースの設置も検討中です。

世界的な研究者が教育の質を高める

名古屋大学の教育。その質の高さは、多くの教育支援プログラムへの採択件数が物語っています。しかし、教育面の一番の強みは、世界最先端の研究者が指導を行う点にあるでしょう。「研究に裏打ちされた講義に価値がある」という副総長の言葉の通り、いくつもの壁を乗り越えてきた研究者自身の姿が、学生にとっては最高の教科書になるはずです。また、世界的な研究者が多彩な分野に揃っていることで、研究の最先端では何が解明済みで何が解明されていないのか、すぐに確認できるというメリットもあります。学生は自分の研究テーマを効率よく発見し、熾烈な国際競争を勝ち抜く第一歩を踏み出せるわけです。
最先端の研究環境の中、時代のニーズへ対応しつつも長期的な視野から展開される名古屋大学の教育。次代に革新的なアイデアをもたらす人材が、今、このキャンパスのそこかしこで無限の可能性を成長させています。



やまもといちろう

1948年生まれ。東京大学大学院工学系研究科修士課程修了。工学博士。1995年から名古屋大学工学部教授。原子力学を専門分野に、安定同位体分離のためのプロセス・システム解析において、世界をリードする研究を進めている。副総長（教育・情報関係担当）、教養教育院長。

70年の歳月を経て、輝きを増す名古屋大学の研究力。それは自由闊達な学風のもと、ひるむことなく困難な課題に挑み続けた先人たちの財産です。そして今、それを受け継ぐ人々が、さらなる高みを目指し、未来を拓こうとしています。



ケミストリーギャラリー

野依良治特別教授のノーベル化学賞受賞を記念する、野依記念物質科学研究館内のギャラリー。化学の重要性を広く社会に伝えることと、次世代研究者の育成を目的に一般公開されている。ノーベル賞展示室として「次世代研究者のためのインスパイアスペース」が設けられ、名古屋大学の研究力の一端を見ることができる。

特集 3

創立70年の歴史を糧に。

2009年、名古屋大学は創立70周年（創基138周年）を迎えました。
大学のこれまでの軌跡を振り返り、目指すべき未来を考える機会として、
節目にあたる本年は、式典や祝賀会など多彩な記念事業を開催します。
名古屋大学が70年の歴史を糧に、世界で、地域でどんな役割を果たしていくのか。
事業を通じて、その想いを広く社会へ発信していきます。

最後の帝国大学として誕生

名古屋大学は、1939年、医学部と理工学部からなる最後の帝国大学として創設されました。1949年には、学制改革により第八高等学校、名古屋経済専門学校などを包括し、6学部からなる新制名古屋大学として再出発を果たします。その後、幾多の改組や新設を経て、総合大学としての規模が発展。2004年からは国立大学法人名古屋大学となり、9学部13研究科を擁する世界的な教育研究拠点として現在に至っています。大学の前身である旧名古屋藩の仮病院・仮医学校が設立された1871年から数えると、今年は創基138周年。総合大学としては創立70周年の節目となり、さまざまな記念事業を予定しています。

地域の文化・学術の拠点として

創立70周年記念事業の一環として、これまでに愛知医学校・愛知病院記念碑の建立、豊田講堂改修などを実施しました。改修事業はトヨタ自動車株式会社及びトヨタグループ各社の支援を受けて行われたもので、名古屋大学のシンボルにふさわしい空間へと整備。その威容は、あらためて学生や教職員の心の拠りどころとなりました。さらに、地域の文化・学術の拠点への発展を期し、改修後の豊田講堂で70周年のプレ事業として名古屋フィルハーモニー交響楽団のコンサートを開催。来場者の方々から、大変な好評を博しました。今後も地域の人々が気軽に訪問できる施設として、さまざまな文化活動を企画し、活用していきたいと考えています。



豊田講堂ホワイエ（アトリウム）



愛知医学校・愛知病院記念碑

名古屋フィルハーモニー交響楽団による記念公演

2008年12月4日、改修後の豊田講堂にて名古屋大学創立70周年記念プレ事業「名古屋フィルハーモニー交響楽団コンサート」が開催された。「名古屋大学基金」の協力者などを招き、大学として感謝の意を表す機会ともなった。

愛知医学校・愛知病院記念碑の完成記念式典

名古屋大学の前身である愛知医学校・愛知病院の新築移転後130年を祝し、2007年10月、記念碑の完成記念式典が行われた。碑は名古屋に西洋医学が移入された明治初頭を彷彿とさせるもので、堀川河畔に面して建立された。

豊田講堂改修事業

創立70周年記念事業の柱として行われた豊田講堂改修事業。世界的な建築家・槇文彦氏設計による建設当時のモダンな外観を継承しつつ、ホワイエ（アトリウム）の増設、音響や空調設備などの機能を拡張。改修も槇氏によるもので2007年12月に竣工した。

市民に開かれた記念事業を開催

今秋は、いよいよ70周年を迎えるにあたり、10月17日に創立70周年記念式典と祝賀会、10月24日にホームカミングデイを開催します。記念式典では、各界で活躍されている幅広い世代の同窓生の方々をパネリストに迎え、名古屋大学の思い出とともに今後への期待を語っていただく記念フォーラムを予定。また、記念事業として、ホームカミングデイの日に行う名古屋フィルハーモニー交響楽団のコンサートは2回公演とし、大学関係者だけでなく、一般の方にも参加いただけるものとします。ホームカミングデイは「人と人とを結ぶメッセージ」をテーマに、先輩と後輩、親と子、大学と地域が互いのメッセージを伝え合う場としたいと考えています。

世界と地域をつなぐ存在へ

こうした式典や行事は、70年の過去を懐かしむだけでなく、この地に研究と教育の風土を根づかせた輝かしい歴史を振り返りながら、現在の大学が抱える課題について、より前向きに考えるきっかけとするものです。今、名古屋大学は「世界の中の大学」「地域の基幹大学」という、両極の役割を同時に担うことが求められています。世界に開かれた大学として留学生を受け入れる環境整備、国際競争の中での研究成果の発信、そして、時代や地域が求める多種多様な人材の育成と、その責務はどれも重要なものばかりです。こうした責務を果たすためには、安定した運営基盤が欠かせません。そこで名古屋大学は70周年記念事業の一つとして「名古屋大学基金」を創設。大学の発展にともに尽くしていただけるよう、卒業生や地域の方々に基金への支援をお願いしています。今後も地道に活動を続け、地域の理解と協力を得ながら、名古屋大学ならではの研究成果と人材という形で社会に還元していきたいと考えています。
世界に通用する教育研究拠点として、地域とつながりながら、真のリーダーにふさわしい人材を世に送り出すために、名古屋大学は70周年を機に、世界と地域での存在意義をさらに高めていきます。



名古屋大学は世界屈指の教育研究拠点として、
教育や研究の発展を目指し、さまざまな取り組みを進めています。
この「FRONTIERS 名古屋大学 最前線」では、
キャンパスの今を伝える最新情報とともに、
今後の方向性について紹介します。

名古屋大学 最前線
FRONTIERS

名古屋大学のGCOE

独創的な研究と充実した大学院教育で
次世代リーダーを育成する。

世界最高水準の研究基盤のもと、世界をリードする人材育成を図るために、
国際競争力のある大学づくりを支援する、文部科学省のグローバルCOEプログラム（GCOE）。
名古屋大学は、支援にふさわしい国際的に卓越した教育研究拠点と認められ、
2007年度には「生命科学」「化学・材料科学」「人文科学」分野において、
2008年度には「医学系」「数学・物理学・地球科学」「機械・土木・建築・その他工学」分野において、
2009年度には「学際・複合・新領域」分野において、これまでに計7拠点が採択されました。
これらの拠点は、GCOE採択前から世界的に高い実績を誇る拠点であり、
また、分野間の連携においても世界最先端を走っています。
グローバリズムの中、日進月歩の先端研究を担う次世代リーダーを育成することは
国家戦略の一つであり、その成果は日本の未来を左右します。
名古屋大学は独創的な研究、充実した大学院教育を推進することで、
この重要な役割を担い、日本と世界の未来への歩みを支えていきます。
ここでは、2008年度に採択された3拠点を紹介します。

名古屋大学のGCOE
機能分子医学への
神経疾患・腫瘍の融合拠点

拠点リーダー　医学系研究科長
祖父江 元　そぶえげん



1950年生まれ。名古屋大学大学院医学研究科博士課程修了。医学博士。1995年より名古屋大学医学部教授。2009年、医学系研究科長に就任。神経変性疾患の病態解明と治療法開発に取り組み、特に運動ニューロン病に対する新規治療は、医師主導型臨床試験のレベルまで展開している。

異分野の融合によって次代の医療を変える
分子標的治療をリードする。

21世紀の医学における最重要課題、それはアルツハイマー病などの神経変性疾患と悪性腫瘍の克服です。特定の神経細胞が死んでいく神経変性疾患と、細胞が増殖する悪性腫瘍は様相が異なるため、従来、研究は別々に行われてきました。しかし、本拠点は神経疾患と悪性腫瘍の病態に共通の機能分子を発見し、診断や治療に互いの成果を活用しようと、10年以上前から両疾患の研究者が融合的に研究を推進。現在は他の研究機関も追随し、その先見性で世界をリードする拠点へと発展しています。
本拠点が目指すのは、神経疾患と悪性腫瘍の分子標的治療の開発です。現在、両疾患の発現に共通する機能分子を標的とした治療法のうち、数件が治験段階へ進展。人への応用まであと一歩に迫り、その成果は世界中で注目されています。このように基礎から応用研究まで一貫して行っているのも本拠点の特長であり、国内有数の神経疾患・がん研究の拠点である国立長寿医療センター、愛知県がんセンターとの連携も、研究・教育両面の強力な基盤となっています。
教育においては、神経から腫瘍、基礎から臨床応用までを網羅する、ベーシックサイエンス・トレンスレーショナルリサーチ・ニューロサイエンス・キャンサーサイエンスの4コースを新設。次世代の国際的なリーダーを育成するために、複眼的な思考を養う教育を展開しています。また、海外の研究者や留学生の受け入れ、学生の海外派遣などを支援。ノーベル医学賞受賞のイグナロ・ルイス・J博士（UCLA教授）など教育・評価アドバイザーの助言を通じ、教育の国際化を推進しています。

名古屋大学のGCOE

宇宙基礎原理の探求
素粒子から太陽系、宇宙に至る包括的理解

拠点リーダー　理学研究科教授
杉山 直　すぎやまなおし



1961年生まれ。広島大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。京都大学大学院理学研究科助教授、国立天文台理論天文学研究系教授などを経て、2006年より名古屋大学大学院理学研究科教授。宇宙論を専門とし、特に宇宙での構造の形成、宇宙マイクロ波背景放射の研究を進めている。

宇宙の全スケールを対象に世界の拠点と連携し分野横断の研究を進めていく。

宇宙には、素粒子から惑星、銀河、大規模構造に至るまで、多様な物質・構造が莫大なスケールで存在しています。そのため宇宙に関する研究は個別に行われてきましたが、共通の基礎原理を探求するためには、宇宙の多様性を全スケールで理解することが必要です。そこで本拠点では、素粒子研究および宇宙の観測、理論研究を行っている理学研究科素粒子宇宙物理学専攻と太陽・地球周りの現象を直接観測する太陽地球環境研究所が連携。さらに、数理物理や惑星科学の研究者が加わり、素粒子から太陽系、宇宙までをつなぐ融合研究拠点を形成しています。
既に国際的な拠点を有しているのも、本拠点の大きな特長です。チリNANTEN望遠鏡、イタリアのニュートリノ実験OPERAなどを主導するほか、すざくX線衛星、世界最大の粒子加速器実験とされるスイスのCERN・LHC実験、ESCATレーダー観測などにも参加。各分野で世界最先端の研究を進めると同時に、新しい研究の芽を求めて「粒子加速」「暗黒物質・暗黒エネルギー」「星間物質と構造の起源」「物質と時空の起源」といった分野連携研究を展開しています。
研究に合わせて、教育面でも自分の専門分野以外の要素を学び、物理学の基礎力を養う『物理学MINIMA』を策定し、学部レベルの知識の習得を確認するためにeラーニングも導入しています。さらに、幅広い研究者が拠点メンバーとして結集しているため、宇宙に関する全分野の教育が可能なのも本拠点ならでは。こうした教育環境から、境界領域に新たな研究分野を切り拓き、国際的に活躍できる人材の輩出を目指しています。

名古屋大学のGCOE

マイクロ・ナノメカトロニクス
教育研究拠点

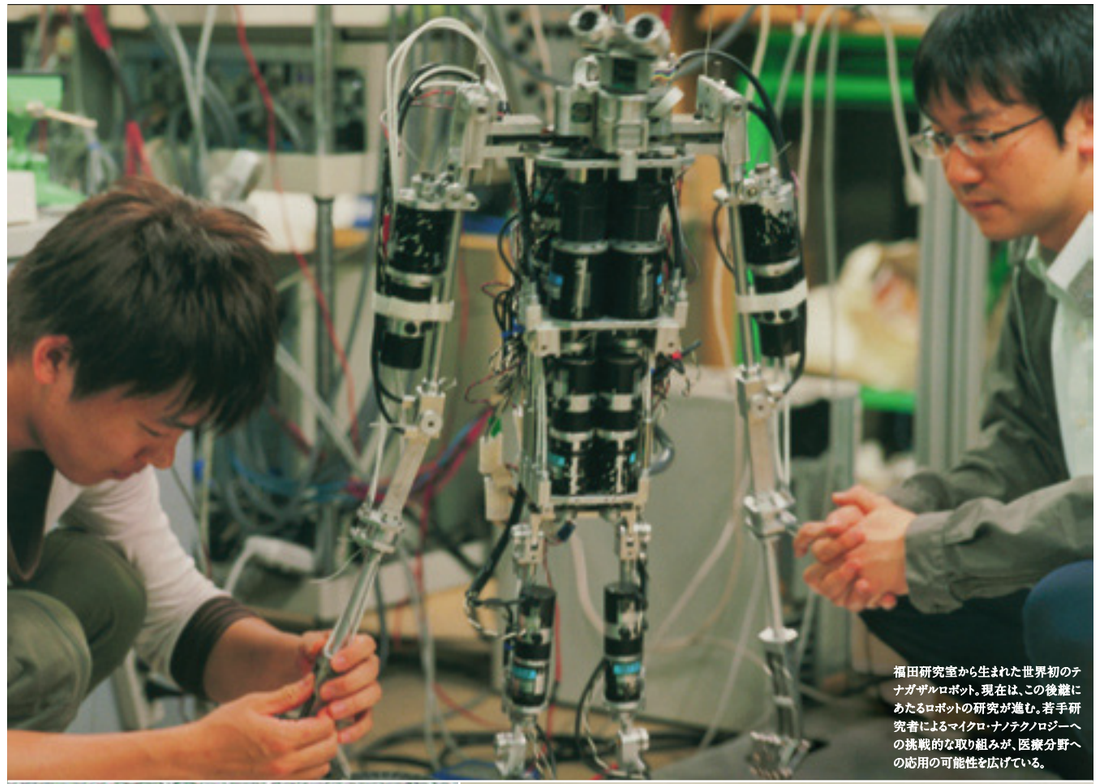
拠点リーダー　工学研究科教授
福田 敏男　ふくだとしお



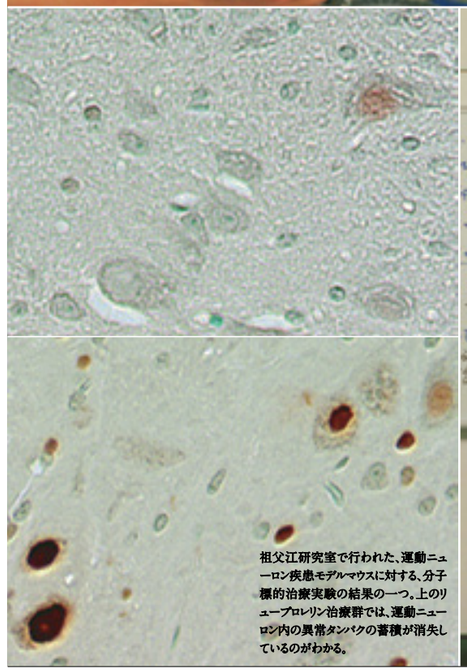
1948年生まれ。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。工学博士。1989年より名古屋大学工学部教授。専門分野は自己組織化ロボット、マイクロ・ナノロボットの研究。福田研究室の研究成果をもとにした超精密人体ロボット「イブ」は、血管内カテーテル手術のシミュレータとして実用化された。

新材料の創造からシステム化までを視野に入れ先端バイオ・医療分野などへの応用も推進する。

ゲーム機から自動車、医療検査技術、ロボットなど、多様な分野で利用されているマイクロ・ナノメカトロニクス技術。本拠点は、名古屋大学が日本で初めて創設したマイクロ・ナノシステム工学専攻の実績を出発点に、また、研究成果を活用する産業界の支援を背景に、早くから日本を代表するマイクロ・ナノメカトロニクス研究拠点として発展を続けてきました。現在はUCLAと連携し、現地の研究者も拠点メンバーに加わって、世界水準の研究を繰り広げています。
本拠点には、材料科学、機械科学、計測・システム工学に加え、バイオ・医療分野の研究者が結集。新しい機能材料やメカトロニクスなどの研究を基盤に、それらを融合したシステム化技術を開発し、さらに、再生医療をはじめとする先端バイオ・医療分野への応用を目指した研究を進めています。特に注目されるのは、デバイスだけでなくシステム化にまでアプローチしている点。社会的な課題にも応えるため、実用化を見据えた道筋を拠点内で構築しています。
その考え方のもと、人材育成についても博士課程前期課程・後期課程において一貫教育を実施。日本の文化と技術を伝える国際的なコミュニケーション能力の育成とともに、工学系の学生に医学分野の教育も行うなど、学際領域で専門知識を活用できる総合力を養成しています。また、後期課程の学生には、実際の事例の検証やインターンシップなどを通じて、課題解決能力を高める実践的なプログラムを展開。総合力・国際力を身につけた人材は社会からも高い評価を得ています。



福田研究室から生まれた世界初のテナガザルロボット。現在は、この後継にあたるロボットの研究が進む。若手研究者によるマイクロ・ナノテクノロジーへの挑戦的な取り組みが、医療分野への応用の可能性を広げている。



祖父江研究室で行われた、運動ニューロン疾患モデルマウスに対する、分子標的治療実験の結果の一つ。上のリューブロレリン治療群では、運動ニューロン内の異常タンパクの蓄積が消失しているのがわかる。



教授と学生の間でも自由闊達に議論を交わせるのが、名古屋大学の伝統を受けた拠点の魅力。杉山教授をはじめ多彩な分野の研究者が揃うことで、学生は疑問があれば意見をぶつけ、最先端の知を多角的に吸収している。

英語教育強化

世界に通用する英語力を目指し
習熟度別のコース
自主学習支援システムを導入。

名古屋大学は学術憲章で表明した「国内外で指導的役割を果たしうる人材の養成」のために、学生の英語力の改善を課題としてきました。そこで、世界に通用する英語力の強化を目的とし、2009年度から全学教育科目の「英語」に新カリキュラムを導入。学部1年次からの学力底上げを目指し、現状の習熟度に対応した履修コース制度を採用するなど、効果的な英語教育や自律的学習を推進しています。

新カリキュラムの第一の特長は、入学時に行うTOEFL-ITP、Criterion（Writing）試験に基づく習熟度別コース編成です。習熟度が低い者には英語力の底上げを、また習熟度が高い者にはより高いレベルへの誘導を図り、学習量の増加による積み上げ方式によって英語教育を充実させます。また、論理的文書作成技法であるパラグラフ・リーディングとパラグラフ・ライティングを導入。学術論文の読解力と論文執筆能力の向上を図ります。さらに、通常の対面授業とeラーニングによる補完授業を併用するブレンディッド学習法を導入。eラーニングの学習履歴により、教育効果や学習効果の分析、フィードバックも行います。

運用体制として、2009年4月に教養教育院言語文化部門のもとにアカデミック・イングリッシュ支援室を、また、学生の英語学習の支援を目的としたE-ラウンジを全学教育棟2階に設置しました。さらに、今年度中には、学習環境の基盤整備として自主学習用クライアントシステムの導入を行い、自己教育力の養成を通した国際基準の英語力の獲得を目指します。



CALL教室
(Computer-Assisted Language Learning)
2008年に新設された言語学習室。デジタル教材がネットワークを介して配信され、学生はオンデマンドで自主学習ができる。ソフトや教材はUSBメモリーに保存し持ち帰ることもでき、自宅での学習も支援する。



建物耐震化8割完了

学生や教職員の生命・財産を守る
安心・安全な環境整備に向けて
耐震改修を推進。

2009年3月、全学教育棟の全面改修が完了し、東山キャンパスのグリーンベルトに面する建物が全て新しく生まれ変わりました。豊田講堂からのキャンパス景観が一新され、発展を続ける名古屋大学を実感できる風景が広がっています。

現在も老朽化した建物の改修を進めていますが、その目的の一つが耐震性能の向上です。名古屋大学が立地する名古屋市は、東海・東南海地震の対策強化地域に指定され、近い将来、震度6弱の大地震の発生が予想されています。このことから、旧耐震設計基準（1981年以前）で設計・建設された耐震性能が低い建物は、新耐震設計基準に基づく改修が急務となっていました。そこで緊急性・必要性の観点から、学生や教職員の生命・財産を守る教育・研究施設を中心に改修を実施。2009年5月現在、耐震改修が必要な建物のうち約82%の改修が完了しました。今年度は工学部8号館南棟、環境医学研究所本館などの改修に着手します。耐震補強にはさまざまな工法があり、グリーンベルト周りの建物については意匠性を考慮し、補強構造体を建物外部に設置する分離型フレーム工法を採用。これ以外にも単に耐震性能の向上だけでなく、機能性や経済性を考慮した工法を選定し施工しています。

名古屋大学の建物全てが必要な耐震性能を有するまでにはあと少し時間を要しますが、できるだけ早く対策を完了すべく、今後とも改修を強力に推進。地震災害の被害を最小限に抑え、安心・安全な環境で多くの教育・研究の成果が得られるよう、施設整備に努力していきます。

















1 工学部2号館
2 文学部本館
3 全学教育棟
4 法学部本館
5 理学部C・D館
6 農学部東研究棟
7 医学部基礎研究棟
8 医学部保健学科南館

法人化後に設置した附属教育研究施設

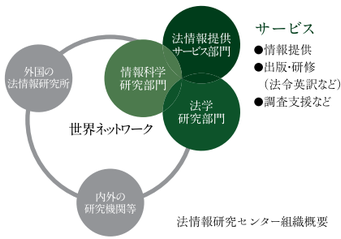
学術の幅広い領域において
独自性ある教育研究を推進する、
18の施設。

2004年の法人化以来、学内組織を大学の責任で柔軟かつ機動的に設置・編制できるようになり、名古屋大学でも既存の施設の統廃合や、時代のニーズを汲む新しい施設の設置などの動きが進みました。ここに紹介する18の施設は、それぞれの研究科の特徴を深く掘り下げ、ときには新しい研究領域に挑みながら、教育と研究とを強力に推進する役割を担っています。そして、そこで得られた成果を通じて、世界の中で、地域の中で、名古屋大学の存在価値を発信していきます。

◎ピックアップ

2008年度に設置されたセンターの中から、3センターを紹介します。

法学研究科
附属法情報研究センター
http://jalii.law.nagoya-u.ac.jp/



法情報研究センター組織概要

グローバル時代の強い要請に応え
日本を代表する拠点として国際的な法情報共有へ貢献する。

人も財も、頻繁に国境を越えて移動するグローバリゼーションの時代。歴史と文化を異にする多国間での法情報共有の必要性は高まり続けています。本センターでは日本法令の外国語訳はもちろん、翻訳技術の開発、世界の法令情報を共有する仕組みの研究・開発に取り組んでいます。内外の研究機関との国際的ネットワークによって、文章化された法だけでなく、社会に生きた法までも統括的に収集・分析。膨大な情報処理のために、学内では情報科学研究科の研究者と連携し、コンピュータによる情報提供システムの研究・開発も進めます。将来的には日本を代表する法情報の研究・発信センターとして、高い付加価値を持つ法情報を世界へ提供していきます。

理学研究科
附属タウ・レプトン物理研究センター
http://www.hepl.phys.nagoya-u.ac.jp/tau_center/



伝統の素粒子研究をベースに国際的な加速器実験を主導し、
21世紀の金字塔となる新発見を目指す。

古くは坂田理論に始まり、小林・益川理論、三田一郎名古屋大学名誉教授のBファクトリー提唱、そしてフレーバー物理に至るまで、名古屋大学の素粒子研究は常に世界に先んじてきました。特に理学研究科が、いち早く注目してきたタウ・レプトン研究は独創的アプローチであり、本センターでは世界最高精度の国際的実験群のデータを集結させ、効率的に解析することで「新しい物理」像の構築を目指していきます。今後、標準理論の最後の粒子であるヒッグス粒子の発見は確実視される上、超対称性粒子をはじめとする「新しい物理」が発見される可能性も高く、これらは世界の歴史に残る金字塔となると考えられています。

工学研究科
附属複合材工学研究センター
http://cerc.engg.nagoya-u.ac.jp/



日本が世界をリードする先端複合材分野において、
地域密着型の研究開発拠点を形成。

航空機の構造材料で採り入れられ始めている炭素繊維複合材（CFRP）など、近年、新しい複合材料に注目が集まっています。こうした先端的複合材料の素材生産は、世界の中でも日本が圧倒的シェアを占めており、今後は自動車、高速列車などさらに幅広い活用も予想されています。国産初のジェット旅客機の開発・生産などをはじめ、日本での航空宇宙産業の中心地は中部圏であり、ここに立地する名古屋大学には、研究開発の主導的役割を担うことが強く期待されています。本センターは、学内研究にとどまらず、地域の実業との緊密な連携のもとで、幅広く長期的な視野に基づく先行研究を行っていきます。

◎18施設一覧と、その設置目的

文学研究科 附属日本近現代文化研究センター	近現代における日本文化の多様な諸相と、それが提起する諸問題を総合的に分析し、日本文化の研究体制の統合を目指す。それとともに、比較文化思想研究を重点的に行い、視覚文化やメディア領域に関する新しい日本研究のビジョンの構築を図る。2008年10月1日設置。
法学研究科 附属法情報研究センター	日本法令の外国語訳推進という政府プロジェクトに協力し、日本法情報の外国語による発信を推進。情報処理技術を用いた法情報の分析、研究、発信のための拠点を形成して、若手研究者などの人材育成を行い、日本における法学の国際化に貢献する。2008年4月1日設置。
経済学研究科 附属国際経済政策研究センター	学内外の研究者とともに国際経済政策、国際経営戦略などに関する研究を行い、その成果を広く社会に提供する。2006年4月1日設置。
理学研究科 附属南半球宇宙観測研究センター	南半球に設置した名古屋大学の先端的宇宙観測研究施設を円滑かつ効果的に運用し、多様な宇宙研究を展開させるとともに、大学院学生・若手研究者の育成や宇宙観測データアーカイブの構築を進め、先端的研究拠点の形成を図る。2006年4月1日設置。
理学研究科 附属構造生物学研究センター	生命科学研究分野における構造生物学の研究手法の導入と、その実行、そして独自の研究手法の開発とを目的とする。2007年2月1日設置。
理学研究科 附属タウ・レプトン物理研究センター	素粒子研究分野におけるタウ・レプトン物理の先端研究拠点として、「新しい物理」の研究推進を図る。また、若手研究者などの人材育成を行い、国内外における素粒子研究の結節点としての役割を果たす。2008年10月1日設置。
医学系研究科 附属医学教育研究支援センター	医学における動物実験や、実験動物の教育研究を行う。また、医学部で共用する分析機器を集中的に維持・管理し、その利用の効率化を図る。それらをもって、先端的医学領域の教育研究への支援を行う。2004年5月1日設置。
工学研究科 附属プラズマナノ工学研究センター	ナノテクノロジー・材料分野におけるプラズマ技術の研究開発を進め、その学術基盤としてのプラズマナノ工学の世界的研究拠点を形成する。また、若手研究者などの人材育成を行い、産学連携や地域・国際連携を促進する。2006年10月1日設置。
工学研究科 附属材料バックキャストテクノロジー研究センター	バックキャスト理念に基づき、材料分野における技術を進化・発展させ、環境に優しい先導的部材開発の実現を目指すための世界的研究拠点を形成する。また、同理念を備えた若手研究者などの人材育成を行い、産学官連携や地域・国際連携を促進する。2008年10月1日設置。
工学研究科 附属計算科学連携教育研究センター	コンピュータを利用した計算科学分野における教育研究を学内外と連携・協力して推進し、最先端の教育研究環境が整備された、当分野における世界的拠点を形成する。また、大規模計算機資源を有効に使える若手研究者、技術者などの人材育成を行い、国際連携や産学官連携を促進する。2008年10月1日設置。
工学研究科 附属複合材工学研究センター	航空宇宙分野における複合材の製品化要請の本格的高まりを背景に、関連する技術課題の解明を図り、最先端の教育研究開発拠点を形成する。そして当分野の人材育成と研究発展に貢献する。2009年2月1日設置。
生命農学研究科 附属フィールド科学教育研究センター	森林科学・動植物生産科学に関する総合的な教育研究を行う。フィールドを基盤とし、環境と調和した持続的な生産技術の開発や、生物機能の高度利用など、新しい研究領域の創生を推進。分野横断的な視野を持つ人材を育成する。2009年4月1日設置。
生命農学研究科 附属鳥類バイオサイエンス研究センター	世界的に多様性の低下が危惧される鳥類の遺伝資源について、組織的に維持、開発、活用などを行う。また、ニワトリ・ゲノム情報などを駆使して、鳥類の高次生命現象の機構解明を目指す。2007年4月1日設置。
環境学研究科 附属交通・都市国際研究センター	世界の先進国・途上国における環境・インフラなどの問題解決を視野に、持続可能な交通・都市システムの構築を目指して、国際的な連携のもとで先進的な政策・技術に関する研究を推進する。2006年4月1日設置。
情報科学研究科 附属組込みシステム研究センター	自動車など各種機械・機器に組み込まれる制御コンピュータシステムの研究開発と人材育成を目的とする。2006年4月1日設置。
環境医学研究所 附属近未来環境シミュレーションセンター	近未来社会の市民生活を想定した、健康障害の解明に貢献する模擬環境の研究と環境ストレスモデル動物の開発を行うことを目的とする。2006年4月1日設置。
太陽地球環境研究所 附属ジオスペース研究センター	太陽地球環境に関する国際共同研究・観測と、領域横断的な重点共同研究プロジェクトの企画・推進。また、観測機器の開発、観測データの標準化、データベースの構築とその共同利用を目的とする。2004年4月1日設置。
エコトピア科学研究所 附属アジア資源循環研究センター	もの、エネルギーなどの資源循環に関する研究を強化し、アジア諸国の研究機関との連携を継続的に発展。アジア地域における、研究ネットワークの中心的役割を担うとともに、若手研究者などの人材育成、研究情報の集積・公開を行う。2007年7月1日設置。

前人未到の3連覇への挑戦

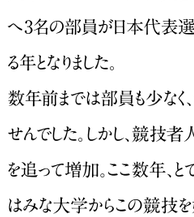
名古屋大学体育会 オリエンテーリング部

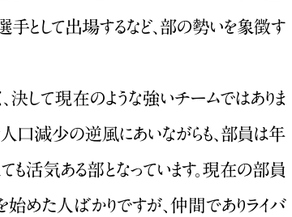
オリエンテーリングとは、山や公園に設置されたポイントを順番に通過し、ゴールまでの時間を競い合うスポーツです。道なき山野を走りながらも、地図とコンパスを駆使してどのようなルートで進むべきかを瞬時に判断し、迷うことなく走りきる力が問われるので、レクリエーションとは異なり、技術・体力のどちらも欠かすことはできません。

2008年度、名古屋大学体育会オリエンテーリング部は「日本学生オリエンテーリング選手権大会リレー競技部門」において、念願の連覇を成し遂げ、史上初の3連覇へ挑戦権を手に入れました。また、「世界大学オリエンテーリング大会」「ジュニア世界オリエンテーリング大会」へ3名の部員が日本代表選手として出場するなど、部の勢いを象徴する年となりました。

数年前までは部員も少なく、決して現在のような強いチームではありませんでした。しかし、競技者人口減少の逆風にあいながらも、部員は年を追って増加。ここ数年、とても活気ある部となっています。現在の部員はみな大学からこの競技を始めた人ばかりですが、仲間でありライバルでもある部員同士、そして日本各地の選手たちと切磋琢磨することで力をつけ、瞬く間に全国で活躍するチームへと駆け上がってきました。

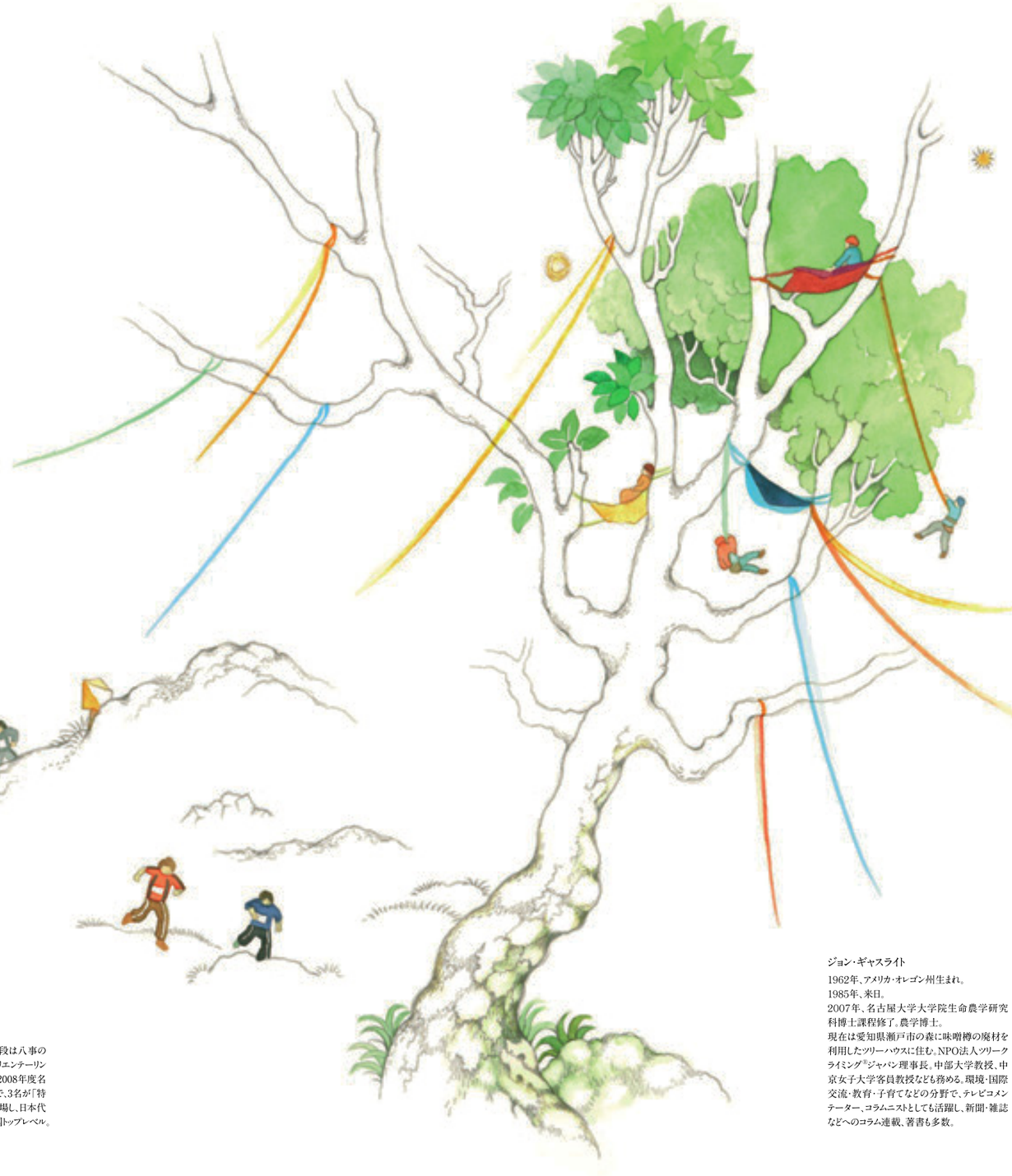
2009年度、チームが目指すのは「日本学生オリエンテーリング選手権大会リレー競技部門」での3連覇。この前人未到の目標を成し遂げるために、これからも部員一同精進していきたいと思います。





名古屋大学体育会
オリエンテーリング部

部員は男女合わせて約40名。普段は八事の森～東山公園付近で、他学のオリエンテーリング部と合同で練習を行っている。2008年度名古屋大学体育会会長表彰制度で、3名が「特別賞」を受賞。さまざまな大会に出場し、日本代表を輩出するなど、その実力は全国トップレベル。



樹上の世界

ジョン・ギャスライト

たかが木登り、されど木登り！ 僕の名古屋大学で研究したテーマは、木登りの“ツリークライミング”。幼年時代、いじめにあい悲しい日々を送っていた時、祖父が僕の手をひいて「こんな時は木登りだ！」と言って、丘の高い木に登らせてくれた。樹上から目の前に広がった世界は行き場のなかった僕の悲しい心に“学校だけじゃないよ、世の中にはたくさん君を待っているところがあるよ”と教えてくれ、それから人生は前向きに広がってきた。

僕は日本で2000年に『ツリークライミングジャパン』という団体を立ち上げ、木に登り、木と遊び、自然を大切にする心を育むレクリエーショナルツリークライミングを普及し始めた。多くの人が樹上目指してツリークライミングにチャレンジし、木の上で嬉しそうに手を振る笑顔を見て、どのように木の上の世界が人間に影響するのか？そして、日本の眠っている森でこのプログラムを取り入れて森も活かしながら人も森も元気になるのかを研究しようと思い名古屋大学大学院へ入学したのだ。

社会人になってからの勉強は時間との戦いだったけれど、教授陣の支えとアンケート回収、分析データの蓄積、みんなに助けられて修了できた。大学院卒業後も僕の未知の世界に対する興味、知りたい！やってみたい！というパッションが止まらない。いつも高い木の上から今日は何が起こるのか!? あれは何だ!? と興味津々の日々を送っている。親という漢字、木の上に立って見ると書く。まさに子どもを育てる親たるもの、学生を育てる先生たるもの、木の上に立って、つまり木に登って視界の広がる高いところからいろんな世界を見ることが大切なのではと思う。



ジョン・ギャスライト

1962年、アメリカ・オレゴン州生まれ。
1985年、来日。
2007年、名古屋大学大学院生命農学研究科博士課程修了。農学博士。
現在は愛知県瀬戸市の森に味噌樽の廃材を利用したツリーハウスに住む、NPO法人ツリークライミング®ジャパン理事長、中部大学教授、中京女子大学客員教授なども務める。環境・国際交流・教育・子育てなどの分野で、テレビコメンテーター、コラムニストとしても活躍し、新聞・雑誌などへのコラム連載、著書も多数。

大学概要

概　略

総　長　濵口 道成

理　事　宮田 隆司（国際学生交流・産学官・社会連携関係担当）・副総長 ● 学外
　　佐分 晴夫（広報・法務・リスク管理・大学間連携関係担当）・副総長
　　杉山 寛行（総務・入試・学生支援関係担当）・副総長
　　藤井 良一（公正研究・施設設備・環境安全・人権関係担当）・副総長
　　髙橋　誠（財務・人事労務・事務総括関係担当）・事務局長

副総長　山本 一良（教育・情報関係担当）
　　松尾 清一（病院経営関係担当）
　　渡辺 芳人（研究・国際企画関係担当）
　　松下 裕秀（評価・総合企画関係担当）

監　事　青木 輝行 ● 学外
　　浅野 良裕 ● 学外・非常勤

職員数　大学教員1,713名　附属学校教員38名
　　事務職員・技術職員1,453名　合計3,204名

面　積　土地面積3,247,424㎡　建物面積750,344㎡

※職員数、面積は平成21年5月1日現在

学部・大学院学生数

平成21年5月1日現在

部局名	学部学生		大学院学生		合計	
文学部・文学研究科	603	(15)	319	(55)	922	(70)
教育学部・教育発達科学研究科	330	(12)	247	(37)	577	(49)
法学部・法学研究科	685	(9)	393	(97)	1,078	(106)
経済学部・経済学研究科	910	(18)	132	(35)	1,042	(53)
情報文化学部	355				355	
理学部・理学研究科	1,186	(3)	527	(24)	1,713	(27)
医学部・医学系研究科	1,516	(2)	899	(66)	2,415	(68)
工学部・工学研究科	3,307	(84)	1,565	(160)	4,872	(244)
農学部・生命農学研究科	748	(7)	386	(28)	1,134	(35)
国際開発研究科			285	(136)	285	(136)
多元数理科学研究科			162	(3)	162	(3)
国際言語文化研究科			229	(102)	229	(102)
環境学研究科			527	(84)	527	(84)
情報科学研究科			374	(54)	374	(54)
人間情報学研究科			4		4	
合計	9,640	(150)	6,049	(881)	15,689	(1,031)

※（内数）は留学生数
※学生数には、学部・大学院研究生、学部・大学院特別聴講学生、聴講生、特別研究学生、科目等履修生を含まない

教育学部附属学校生徒数

平成21年5月1日現在

学校	入学定員	学級数	生徒数
中学校	80	6	239
高等学校	120	9	357
合計	200	15	596

沿　革

前身校期

1871（明治 4）年	仮病院 仮医学校開設
1872（明治 5）年	養病院設置
1873（明治 6）年	仮病院 医学講習場設置
1875（明治 8）年	愛知県病院設置
1876（明治 9）年	公立医学所 公立医学講習場設置
1878（明治11）年	公立医学校設置
1881（明治14）年	愛知医学校設置
1901（明治34）年	愛知県立医学校設置
1903（明治36）年	愛知県立医学専門学校設置
1908（明治41）年	第八高等学校設置
1920（大正 9）年	愛知医科大学設置
	名古屋高等商業学校設置
1931（昭和 6）年	（官立移管）名古屋医科大学設置

帝国大学（旧制大学）期

1939（昭和14）年	名古屋帝国大学創設（医学部と理工学部の2学部）
	名古屋帝国大学臨時附属医学専門部設置
1942（昭和17）年	名古屋帝国大学理工学部を理学部と工学部に分離
1943（昭和18）年	名古屋帝国大学航空医学研究所設置（1945年廃止）
1944（昭和19）年	名古屋工業経営専門学校設置（1946年廃止）
	名古屋経済専門学校設置
	名古屋帝国大学附属医学専門部設置
1945（昭和20）年	岡崎高等師範学校設置
1946（昭和21）年	名古屋帝国大学環境医学研究所設置
1947（昭和22）年	名古屋大学（旧制）と改称
	名古屋大学附属医学専門部設置
1948（昭和23）年	名古屋大学文学部、法経学部を設置

新制大学期

1949（昭和24）年	旧制名大、医専部、八高、名経専、岡崎高師を包括
	文、教育、法経、理、医、工の6学部及び環境医学研究所で
	新制名古屋大学として発足
	空電研究所、附属図書館を設置
1950（昭和25）年	法経学部を法学部と経済学部に分離
1951（昭和26）年	農学部設置
1953（昭和28）年	文学、教育学、法学、経済学、理学、工学の6研究科を設置
1955（昭和30）年	医学、農学の2研究科を設置
1961（昭和36）年	プラズマ研究所設置（1989年廃止、核融合科学研究所へ発展）
1963（昭和38）年	教養部設置（1993年廃止）
1971（昭和46）年	大型計算機センター設置（2002年廃止）
1973（昭和48）年	水圏科学研究所設置
1977（昭和52）年	名古屋大学医療技術短期大学部併設（2001年廃止）
1990（平成 2）年	空電研究所を太陽地球環境研究所に改組
1991（平成 3）年	大学院国際開発研究科設置
1992（平成 4）年	大学院人間情報学研究科設置（2003年廃止）
1993（平成 5）年	情報文化学部設置
	水圏科学研究所を大気水圏科学研究所に改組（2001年廃止）
1995（平成 7）年	大学院多元数理科学研究科設置
1997（平成 9）年	大学院農学研究科を大学院生命農学研究科に改称
1998（平成10）年	大学院国際言語文化研究科設置
2000（平成12）年	大学院教育学研究科を大学院教育発達科学研究科に改称
2001（平成13）年	大学院環境学研究科設置
	地球水循環研究センター設置
2002（平成14）年	情報連携基盤センター設置（2009年廃止）
	大学院医学研究科を大学院医学系研究科に改称
2003（平成15）年	大学院情報科学研究科設置

国立大学法人期

2004（平成16）年	国立大学法人名古屋大学設立
	大学院法学研究科実務法曹養成専攻(法科大学院)設置
2006（平成18）年	エコトピア科学研究所設置
2009（平成21）年	情報基盤センター設置

組織・機構



9学部（文、教育、法、経済、情報文化、理、医、工、農）
8研究科（文学、教育発達科学、法学、経済学、理学、医学系、工学、生命農学）
5独立研究科（国際開発、多元数理科学、国際言語文化、環境学、情報科学）
3附置研究所（環境医学、太陽地球環境、エコトピア科学）



名古屋大学プロフィール 2009

発行年月／2009年6月
企画編集／名古屋大学広報室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
Tel 052-789-2016
http://www.nagoya-u.ac.jp/